

書 評

アーチャー・ブラウン 著

『ゴルバチョフ・ファクター』

評者 塩川 伸明

ゴルバチョフとペレストロイカの時代からほぼ20年が経った。「十年一昔」と言うが、東欧激動・冷戦終焉・ソ連解体等々といった一連の出来事は、今や「二昔」前のことになっているわけである。かつて多くの人の耳目を引きつけていた出来事が距離をおいた歴史研究の対象になるには数十年の時間を要するというのが、歴史学上の常識だが、いまや二昔前の出来事となったゴルバチョフとペレストロイカについても、そろそろ歴史研究として取り組むにふさわしい時期にさしかかっているとと言えるだろう。なお、本書の原著は1996年の刊行だが、著者ブラウンは2007年に、新たに利用可能となった文書館資料類に依拠した新著を刊行している⁽¹⁾。もっとも、アルヒーフ資料というものは膨大な文書の集成であり、その全面的利用には長い時間が必要とされるが、ブラウンの新著では、とりあえず最も代表的な文書数点が利用されるにとどまっている。アルヒーフに依拠した本格的な歴史研究は今後の課題として残っている⁽²⁾。

*

1985年3月に、当時諸外国ではまだあまり広く知られていなかった若手の政治家ミハイル・ゴルバチョフがソ連共産党書記長に選出されたとき、これが重大な変化の始まりとなるかもしれないという大胆な予測をした欧米の専門家が2人いた。本書の著者アーチャー・ブラウンとアメリカのジェリー・ハブである(52ページおよび714-715ページの注46参照)⁽³⁾。2人ともゴルバチョフ時代を通して多くのペレストロイカ論を公にし、またソ連解体後には、ゴルバチョフ時代を事後的に振り返る大著をほぼ同時期に書き上げた⁽⁴⁾。早い時期にゴルバチョフ登場の意義を見抜いたという自負のなせる業だろう。

ブラウンの場合、チェコスロヴァキアのズデネク・ムリナーシ(1950年代前半にモスクワ大学法学部に留学し、若きゴルバチョフの友人となった)から早い時期に個人的情報を得ていたことの意味が大きかった⁽⁵⁾。本書でも、第二章でこの情報が活用され、若き日のゴルバチョフが活写されている。

こうした経緯からも容易に推察されるように、本書における著者の観点はゴルバチョフの役割をきわめて高く評価するものである。人によっては、「買いかぶりすぎ」との印象さえいだくかもしれない。しかし、ブラウンは練達の政治学者であり、本書は決して特定政治家(ゴルバチョフ)の礼賛のみをこととした本ではない。情報収集も、立論の綿密さもともに最上級であることは、本書の結論に同意しない読者も、認めるところだろう。そういうわけで、本書は当たり障りない概説書ではなく、むしろ論争的な解釈を打ち出した個性的な書物だが、同時に、

その説得力の故に、ペレストロイカ・冷戦終焉・ソ連解体といった現代史上最大のトピックについて考える際に誰も無視することのできないものとなっている。

ゴルバチョフを肯定的に評価するという際に、誰もがぶつかる問いは、「彼はいくら改革派といっても、所詮は共産党幹部の出身であり、その立場を最後まで捨てようとしなかったのではないか」「彼は社会主義イデオロギーに最後までこだわっていたのではないか」「彼の改革というものは、そうしたイデオロギーと体制の大枠維持をあくまでも前提したものであり、体制転換というよりはむしろ体制の部分的修正による延命策だったのではないか」といった一連の疑問である。

ブラウンはこうした疑問を正面から受けとめ、それに全面的に反論しようとしている。その議論をあえて単純化していえば、次の2点が重要である。第一にゴルバチ

ョフは柔軟な学習能力をそなえた人物であり、当初には予期していなかった事態にぶつかるなかで、その改革構想をエスカレートさせていった。したがって、ペレストロイカ初期の彼の発言を捉えて、その改革構想の狭さや限界を指摘するのは、その後の変化を見落とすものである。第二に、ある時期（およそ1989年頃）以降のゴルバチョフの立場は、表面上の言葉づかいはともかく実質的には、共産主義よりも西欧流の社会民主主義に近づいていた。政権末期のゴルバチョフが——そして引退後も——こだわっているかにみえた「社会主義」とは、もはや共産主義ではなくなっていた。もっとも、「ローマ法王であると同時にマルチン・ルターでもある」ゴルバチョフとしては、「レーニンを意識的に拒否することなく、レーニン主義者であることをやめる」という離れ業を演じなければならなかったが（200、253ページ）、ともかく1989—90年のソ連はもはや共産主義の基本特徴を失っていた（593—604ページ）。

とすれば、「エリツィン革命」は、共産主義からの離脱にとっては不必要な権力闘争にすぎなかったということになる。なお、本書ではゴルバチョフに対する高い評価と表裏一体をなしてエリツィンへの厳しい批判がなされているが、その一つの論点は、彼は支持者たちが想定したような民主主義者などではなかったという指摘にある。ゴルバチョフが武力行使をできる限り避けようとしたのと対照的に、エリツィンのもとでチェチェンに対する残虐な武力行使が行なわれたという指摘（489ページ）に、それが象徴されている¹⁶。

*

本書の論点は多岐にわたる（特に重要な位置を占める民族問題について、紙幅の制約からここで立ち入ることはできない）が、著者がゴルバチョフの社会民主主義への接近を高く評価している背景には、彼自身の政治的信条があるようにみえる。ソ連解体以降、欧米でも日本でも、市場経済と民主主義をイコールで結ぶ思考法が席卷したが、著者はそれに懐疑的である。ロバート・ダールに依拠して、民主主義は指令経済と両立しないだけでなく、純粹の市場経済とも両



小泉直美・角田安正訳
藤原書店、2008年3月
A5判・768ページ
定価6800円（本体）

立しないという見解に賛意を表明しているあたりに、そうした考えが窺われる (287ページ)⁷⁾。ここには、市場経済への社会的規制とリベラル・デモクラシーとを結びつける社会民主主義への著者の共感をみることができる。

ここで一つの疑問が湧く。ゴルバチョフの社会民主主義のほうがエリツインの権威主義的な市場経済化路線よりもよい道だったとして、現実問題として前者は後者に敗北した、それはなぜか、という問いである。この点に関して、著者はゴルバチョフのさまざまな失敗——不適切な人事、改革路線実施における個別の判断ミス、タイミングのまずさ等——を挙げている。それはそれで一定の有意義性をもっているが、それがすべてかには異論の余地があるだろう⁸⁾。

著者によれば、ソ連解体後のロシアではゴルバチョフ改革の意義が理解されず、彼の人気は非常に低い、これはアメリカで優勢なゴルバチョフ理解と奇妙に符合するという。それというのも、アメリカやロシアでは、ヨーロッパと違って社会民主主義の伝統がほとんどなく、そのため共産主義と社会主義が同一視されがちであり、ゴルバチョフがソヴェト型「社会主義」(=共産主義)から西欧型社民主義に移行したことの巨大な意義も見落とされてしまう、というのである (249ページ)⁹⁾。著者はこの論点をゴルバチョフ擁護の観点から提起しているが、同じことを裏返していうならば、ゴルバチョフ流の考えは西欧では受け入れられやすい反面、アメリカやロシアでは受け入れられにくく、そのためロシアで勝利を収められなかったのも無理はない、ということになるのではないか¹⁰⁾。これは著者の意には反するだろうが、ゴルバチョフ敗北の一つの説明になるかもしれない。

- (1) Archie Brown, *Seven Years That Changed the World: Perestroika in Perspective*, Oxford University Press, 2007 [以下、*Seven Years* と記す]. 特に重視されている新資料は、共産党裁判の証拠としてエリツイン大統領側から特別に提出された共産党内部文書 (元の共産党総務部のアルヒーフのフォンド89) およびゴルバチョフ・フォンドのアルヒーフである。ゴルバチョフ・フォンド資料のうち、ゴルバチョフ側近が政治局会議などでとっていたメモ類の一部は、В Политбюро ЦК КПСС... По записям Анатолия Черняева, Вадима Медведева, Георгия Шахназарова (1985–1991). М., 2006として刊行されている。
- (2) 一つの試みとして、塩川伸明「ソ連解体の最終局面——ゴルバチョフ・フォンド・アルヒーフの資料から」『国家学会雑誌』第120巻第7・8号、2007年。
- (3) この点につき、*Seven Years*, p. 223, n. 29も参照。もともと、ブラウンとハフは後に見解を異にするようになる (次注参照)。
- (4) ブラウンのペレストロイカ論としては本書と新著 *Seven Years* とが代表的である。ハフも多くの著作を書いているが、代表的なペレストロイカ論は、Jerry F. Hough, *Democratization and Revolution in the USSR, 1985–1991*, Washington, DC: Brookings Institution Press, 1997. ブラウンとハフを比較しつつ論評した小文として、塩川伸明「二つのゴルバチョフ論」上・下、『UP』(東京大学出版会) 1999年1月号、2月号。
- (5) ムリナーシは1968年の「プラハの春」で大きな役割を果たし、フサーク時代にチェコスロヴァキア共産党から除名された (1968年に関係する彼の著作として、『夜寒——プラハの春の悲劇』、新地書房、1980年がある)。後に西欧に出国し、社会民主主義の立場の政治家として活動した (1997年に死去)。ペレストロイカとソ連解体を見届けた後、ゴルバチョフとムリナーシは永年の交友を振り返りつつ、長大な対話を単行書として公刊したが、その書物にはブラウンが序を寄せている。Mikhail Gorbachev and Zdeněk Mlynář, *Conversations with Gorbachev: On*

Perestroika, the Prague Spring, and the Crossroads of Socialism, Columbia University Press, 2002.

- (6) なお、ブラウンは言及していないが、1991年11月にチェチェン情勢が緊迫したとき、エリツィンは武力行使を指示したが、それを食い止めたのは、「ソ連大統領」としての権限を辛うじて保っていたゴルバチョフの介入だった。塩川伸明『ロシアの連邦制と民族問題——多民族国家ソ連の興亡Ⅲ』、岩波書店、2007年、198-199ページ、および前掲「ソ連解体の最終局面」、124ページ参照。
- (7) より詳しくは、*Seven Years*, p. 198 参照。ブラウンが依拠しているダール論文は、Robert A. Dahl, "Why All Democratic Countries Have Mixed Economies," in John W. Chapman and Ian Shapiro (eds.), *Democratic Community*, New York University Press, 1993.
- (8) ハフはエリツィンを否定的に評価するという限りではブラウンと共通するが、ゴルバチョフ敗北の理由の説明に関しては異なった見地に立つ。前注(4)参照。
- (9) より丁寧な説明は、*Seven Years*, pp. 196-197.
- (10) 西欧で今なお社会民主主義が健在といっても、かつての社会民主主義に比べれば自由主義への接近を強めた変容を経験しているのではないかといった疑問もあるが、ここで立ち入ることはできない。ついでにいえば、日本の状況は西欧よりも米ロと近いように思われる。ソ連解体のあおりで壊滅的打撃を受けたのは、いささか皮肉なことに、日本共産党ではなく、日本社会党およびその後継党たる社民党だったからである。

しおかわ・のぶあき 東京大学教授